

塚本邦雄における初期の位相 (一)

——「木槿」を中心として

安 森 敏 隆

岡井隆に「アララギ」の習作期があり、山中智恵子に「日本歌人」の少女期があったように、塚本邦雄においては、杉原一司と短歌の「方法」を模索した同人誌「Methode」がそれに相当すると考えられていた。「Methode」の創刊にあたる一巻一号（昭和24年8月10日発行）には、杉原一司の評論エッセイ「方法の位置——やさしい短歌論」に並んで塚本邦雄の「アルカリ歌章」十五首が雑誌の一面を飾っている。

アルカリ歌章

A

赤い旗のひるがへる野に根をおろし下から上へ咲くデギタリス
賈札の類かろらかに街を流れ野にながれ暗い夕日にひびき
淡水の潮とまじはる河渉り旅人ら麦の種子をもとめき
塵港は霧ひたひたと流れよる今宵幾たり目かのオフエリア
炎天の河口に流れくるものを待つ晴朗な偽ハムレット

塚本邦雄における初期の位相(一) ——「木槿」を中心として

卓上に舊約、妻のくちびるはとほい鹹湖の味爽あけのねむりを
アルカリの湖底に生れて貝マるはきりきりと死の螺旋に巻かれ
瘰癧ひびれる死鷄の眼、輪唱の輪唱の輪のひろがるなかに
永いながい雨季過ぎ 巨おほき向日葵にコスモポリタンの舌ひるがへ
る

C

偽公爵と踊りたる夜の霧に濡れ銀色の微をふくバル・シューズ
ゆきたくてたれもゆけない夏の野のソーダファウンテンにあるレ
ダの靴
表には蛇、裏に首くつきりと刻みたる金貨麵麴屋にわたす
乾葡萄の蒸せる匂ひにいらいと少年は背より抱きしめられぬ
為替手形や葡萄の房をポケットにをんなから女の旅にくたびれ
くりかへし翔べぬ天使によみきかす・白葡萄醋酸製法秘傳

ここには従来短歌（昭和二十四年以前）の〈素材〉と〈私〉と
〈詩〉の範疇をはるかにこえた三十一首の羅列がある。〈素材〉的

には、「オフェリア」や「ハムレット」や「アルカリの湖底」「コスモポリタン」「レダの靴」などがうたわれており、日本の風土や社会や日常といったところに素材をもとめていた従来のものに比べ、まことに異質なものであった。又、一首一首の背後にびつたりとくっついているはずの日常形而下的な作者の〈私〉もここではなまのかたちで一切登場せず、これら一連の背後のトータルな認識者として登場するのみである。又それにとまない一首一首の〈詩〉の質も従来の抒情とはまったく違った音色を奏でているのである。だが、このタブロイド版の同人誌「Méthode」は昭和二十五年の二月までに七号出ただけでほとんど黙殺されてしまい、世評にのぼることも喧伝されることもなかった。さらに、これらの歌を含め、昭和二十六年八月刊行された第一歌集「水葬物語」（メトード社）は今日では有名すぎるほど有名になったが、当時は百二十部限定刊本であり、人口に膾炙されることはあまりなかった歌集である。昭和三十年代にはいつて、前衛短歌運動の台頭とあいまって塚本邦雄は次々と新しい歌をつくり歌集を刊行してゆくことになる。第二歌集「裝飾樂句」（作品社 昭31・3）、第三歌集「日本人靈歌」（四季書房 昭33・11）、第四歌集「水銀傳説」（白玉書房 昭36・2）、第五歌集「緑色研究」（白玉書房 昭40・5）、第六歌集「感幻樂」（白玉書房 昭44・9）、第七歌集「星餐図」（人文書院 昭46・12）、第八歌集「蒼鬱境」（湯川書房 昭47・8）、第九歌集「青き菊の主題」（人文書院 昭48・10）、第十歌集「されど遊星」（人文書院 昭50・6）である。

第十歌集を出した昭和五十年の十一月になって、実は昭和二十六

年にはじめて刊行された処女歌集「水葬物語」以前につくられた未発表、既発表の作品をまとめて未刊歌集「透明文法」（大和書房 昭50・11）と命名して刊行するのである。その「跋文」にはその間の事情が次のように書かれている。

杉原一司に獻じた「水葬物語」は、彼と相見えた時からその死に到る約二年間の作品を収録してゐた。すなはち、同人誌「メトード」初出の作品群を編輯構成したものである。それ以前の夥しい試作を深く切捨てることによつて彼に殉じ、暗中模索の過去は葬る決意であつた。過去は葬つたが、その時保留した未来が私に以後二十余年作品を書き続けさせる結果を生んだ。杉原に殉ずることを、短歌、定型韻文詩ひいては文芸と共に生きることになつたとと言ふべきだらうか。

切捨てた作品は、私が戦後廢墟に歌人として目覚め、ほとんど孤立無援の状況下に、ひそかに、しかし烈しい敵意に燃えて書き継いできたものであり、中には歌誌「オレンジ」（後「日本歌人」）、「青檜」、同人誌「くれなる」に発表したものもまじへてゐる。未知の杉原が作品によつて私を認め、ただ一人の盟友と想定しはじめたのもこの期間であつた。私も亦彼が「オレンジ」や同人誌「花軸」に発表する作品や試論に稀なる念友の志を酌みとつた。（以下略）

すなわち「水葬物語」に収録されているもつとも初期の作品ともわかれていた「メトード」の初出作品以前に「オレンジ」（後「日

本歌人」)や「青櫛」や「くれなる」に発表されていた作品があり、「私が戦後廢墟に歌人として目覚め、ほとんど孤立無援の状況に、ひそかに、しかし烈しい敵意に燃えて書き進んできた」ものの中から三百首を選んで、未刊歌集「透明文法」と名づけて上梓したのである。塚本邦雄はすでに昭和十九年十一月に「潮音」の流れをくむ「青櫛」に参加し、毎月作品を発表しており、戦後すぐには「オレンヂ」に参加し、その後「日本歌人」に作品を発表したり、昭和二十二年から二十三年にかけては大阪を中心に二代ばかりの若い人があつまってつくっていた「くれなる」にも参加し、短歌を創り発表していたのである。

ところが、実は塚本邦雄にはもっとそれ以前において「木槿」時代の習作期が敷衍していたのである。政田岑生の作制した「塚本邦雄年譜」(「国文学」昭51・1)と同「年誌」(「定本 塚本邦雄湊合歌集《別巻》」所収)を参考にしながらその辺の事情をたどってみると次のようになる。

昭和十七年(一九四二年)、第二次世界大戦下において「動員令」により八月中旬突如呉海軍工廠に徴用されることになる。昭和十九年(一九四四年)八月末「母死亡」し「空襲激化、連日身辺に死者を見、明日の生は全く予想し得ず」という状態がつき敗戦をむかえるということになる。

この二十歳から二十三歳の期間でむかえた戦争体験、敗戦体験を通じて戦中後期派に共通する自我亡失が内部に沈潜し現実へのネガティブな視点が塚本にあたえられることになる。ただこの期の塚本にとって、昭和十七年の「幸野羊三主宰歌誌『木槿』」に入会、断続

塚本邦雄における初期の位相(一)——「木槿」を中心として

的に作品を発表」という項と、昭和十九年の「大阪の歌誌『青櫛』」に参加、毎月作品を発表、同人となる」という歌誌参加の項が政田岑生の「年譜」にはみえるのであるが、この期の塚本邦雄の歌そのものについてはあまりふれられていない。

今のところ二、三の単発的な論考があるのみで、塚本邦雄のこの期の歌の経歴はエア・ポケットになっている。この期、塚本邦雄はなんと三百八十八首の歌を「木槿」に投稿し、きたるべき短歌革新のために新しい「方法」を模索していたのである。

昭和五十九年五月二十七日、塚本邦雄は四十年ぶりに呉の地に来て「初心忘るべし——わが短歌入門——」と題して二時間にわたって「初心忘るべし」の時代の歌と人について話し、自らこの期のエア・ポケットの部分を開顕してみせてくれたのである。その中で次のように語っている部分は氏のかつての思考と今の思考をアマalgamしたものとしてみれば、

「木槿」は私にとつての初心である。けれども、私が生涯消すことのできない「汚点」と考えているのは、大麥不遜な考えかも知れません。誰にでも、幼年期、揺籃期というものはある。それは、免がれ難い人間の業じゃないかと思ひます。そう思ひつつも、この「木槿」の昭和二十二年以前の初出作品群が、一切消えてなくなればいいと考えたことすらあります。もしも、それが古書店にでも出れば全部買ひとつて焼き捨てたいと思つたくらいです。いまでもそういう気持はかすかにあるんですけれども、今度

読み返してみても、妙に聞き直ったような気持も生まれした。仮に、今日の作が一応完成度の高いものとするれば、落差の甚しい初期作品は、まづければまずいほど、私の努力のあとがはつきりする。変化の様子がきわだつ、歓迎すべきだろうと。

ここには、第一歌集「水葬物語」から現在第十四歌集「豹變」(大和書房 昭59・8)をものしてきたひとりの歌人(うたびと)としての自信と孤高の聲がかくされていることをのみがしてはならない。

「木樞」は昭和九年(一九三四年)四月に幸田幸太郎(本名・森野数夫)が発行者となつて第一巻第一号を出している。そして、そのすぐあと「潮音」の同人、幸野羊三(本名・塩崎直幸)が入社すると幸田幸太郎は補佐役となり、そのかわり幸野氏が以後昭和二十一年十月に死去するまで主宰者となつて実質的に「木樞」を呉の地においてひっぱつてゆくのである。塚本邦雄が「木樞」に参加した昭和十八年当時、広島には「晚鐘」や「真珠」や「言霊」という有力な歌誌があつた。又、呉には「木樞」の他に「石楠花」という歌誌もあつたが「どうやら「木樞」の方は歴然と太田水穂系の雑誌らしい。だから「石楠花」はよくわからない、君が確かめてごらんといつて見せてくれました。そこには万葉調の、勤王の志士の歌のようないふ不思議な格調のある作品がずらりと並んでいました。どうもこちらには肌合わないようだから潮音系とかいう「木樞」の方へ歌を出して見ようかと、そう思いました。」(「初心忘るべし」ということで昭和十八年から二十三年にかけて「木樞」にはじめて作品

を発表していくのである。塚本邦雄の「木樞」への作品発表をまとめて表にしてみると次のようになる。

回	項	巻(月)号	発行年月	作品名(欄)	歌数	発表頁
1		第十巻 第五号	昭18・5・25	無題(詠草欄)	8	9
2		第十巻 第七号	昭18・7・26	無題(詠草欄)	5	8
3		第十巻 第八号	昭18・8・20	無題(特別社友詠草欄)	5	10
4		第十巻 第九号	昭18・9・20	無題(同人短歌欄)	4	3~4
5		第十巻 第十号	昭18・10・20	無題(同人短歌欄)	5	3~4
6		第十巻第十一号	昭18・11・20	無題(同人短歌欄)	5	3
7		第十一巻第一号	昭18・12・25	無題(同人短歌欄)	5	1~2
8		第十一巻第二号	昭19・2・1	無題(同人短歌欄)	8	1
9		第十一巻三月号	昭19・3・1	無題(同人短歌欄)	6	1~2
10		第十一巻四月号	昭19・4・1	無題(同人短歌欄)	8	3
11		通巻 一二〇号	昭20・3	失明(近き友木樞短歌欄)	3	3
12		通巻 一二二号	昭20・4	無題	6	1
13		通巻 一二三号	昭20・5	無題	5	1
14		通巻 一二四号	昭20・6	無題	3	1

15	五月号 (第十三卷第五号)	昭21・5・25	潤れ菜	7	5
16	六月号 (通卷二二七号)	昭21・6・25	花薊(木権集)	5	3
17	七月号 (通卷二二八号)	昭21・7・25	あちさる(木権集)	5	2
18	八月号 (通卷二二九号)	昭21・8・25	倫理(木権集)	4	2
19	九・十月合併号 (通卷三〇号)	昭21・10・25	いのち(木権集)	5	1 1 2
20	十・十一月合併号 (通卷三一号)	昭21・12・25	一穂の草(木権集)	8	7 7 8
21	十一月号 (通卷三二二号)	昭22・1・25	転身の冬(木権集)	9	1 1 2
22	二月号 (通卷三三四号)	昭22・3・10	華やかな嘘(木権集)	10	7 7 8
23	四月号 (通卷三三三号)	昭22・3・25	鏡舌	7	5 7 6
24	五月号 (通卷三三四号)	昭22・4・25	数寄なる花	11	7 7 8
25	六月号 (通卷三三三三号)	昭22・5・25	綺想曲	11	5 7 6
26	七月号 (通卷三三六号)	昭22・6・25	アラバスク	10	1 1 2
27	八月号 (通卷三七七号)	昭22・7・25	粋な祭 (同人短歌)	8	1 1 2
28	九月号 (通卷三八八号)	昭22・9・25	炎宴 (同人短歌)	14	2 7 3
29	十月号 (通卷三九九号)	昭22・10・25	假晶 (同人短歌)	13	4
30	十一月号 (通卷四〇号)	昭22・11・25	非業の秋 (同人短歌)	24	1 1 2
31	十二月号 (通卷四一〇号)	昭22・12・25	血みどろの霜	28	2 7 3

塚本邦雄における初期の位相(一) — 「木権」を中心として

32	一月号 (通卷一四〇号)	昭23・1・25	寒光・火喰鳥 (同人短歌)	13	4 7 5
33	六月号 (通卷一四一号)	昭23・6・1	牡丹雪	6	5
34	七月号 (通卷一四二号)	昭23・9・1	暗緑調・密月抄・ 転落公子(詠草欄)	14	4

塚本邦雄が「木権」に作品を発表していた昭和十八年五月二十五日発行の第十卷第五号(通卷一〇九号)から昭和二十三年九月一日発行の通卷一四二号の間において雑誌は三十六冊発行されている。

塚本邦雄が作品を発表している12回目と13回目の間に通卷一二二号がはいっているのであるが、それは昭和二十年四月号(通卷一二二号)の「その二」^マとして発行されているので、すでに「その一」にあたる前号で塚本邦雄の作品は掲載されているのでこの号には載っていない。実質的に塚本邦雄が欠詠したのは1回目と2回目の間の昭和十八年七月五日発行の第十卷第六号のただ一回ということになるのである。

「木権」の巻と号の数え方はまらまちで、多少の重複や混乱がみとめられるが、掲出の表は初出のままにしておいた。

二

「木権」昭和十八年度の巻頭には、「日本文學報國會短歌部會宣誓」の三箇条が麗々しく、つねにこの年は飾られていたことは記憶されていてよいことのように思われる。

一、我等八天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉リ大東亞戦争ノ完勝ヲ期ス

一、我等ハ肇國ノ精神ヲ體シ短歌ヲ以テ日本文化の發展ニ寄與セントス

一、我等ハ短歌ヲ以テ國家總力戰ノ一翼タランコトヲ期ス

このスローガンを半ば信じ、かたや文学の情熱に賭けて、当時の短歌雑誌は日本各地において営々と継続されてゆくのである。塚本邦雄の短歌がはじめて載った。「木槿」(第十卷第五号) 昭和十八年の五月号は、次のような全体十六頁からなる小冊子で、多少の増減はあるものの前後の「木槿」もだいたいこんな構成をとり、二十頁までの雑誌であった。

採用されたのである。

闇ながら杉の新芽の匂ひたつ生れし家の門をくぐりぬ
粥煮ます母に寄り添ひ見る雨は木々の新芽に泌みゆきにけり
家具調度いろ寂びそめてつつましき母となりたる姉と語り
いつさんに晝の斜面を駆け下りてたんばの蝶を飛ばしめにけり
にほやかに蕊は息づく紅椿花の體温はあたたかならむ
眠る間も歌は忘れずこの道を行きそめしより夜も晝もなし
工場の敷地となりて公園の若葉の樹々は掘りおこされぬ
ガスマスクしかと握りて伏しにけり壕内の濕り身に迫りくる(訓練)

同人短歌 幸野羊三他一九名 1~5頁(上段 $\frac{3}{4}$)
新古今和歌集覚書 貝塚 雅 1~5頁(下段 $\frac{1}{4}$)

歌集「豊玉」を讀みて 小林マリ子 6~7頁

死に狂ひの語について 光子 7頁

詠草 佐々木久仁方他九名 8~9頁

特別社友詠草 半口正幸他一八名 10~14頁(上段 $\frac{3}{4}$)

エッセイ 音楽 藤崎宅 10~12頁(下段 $\frac{1}{4}$)

編集後記 幸野園より 幸野羊三 12~14頁(下段 $\frac{1}{4}$)

社規

奥付

前月抄 十四首 15頁

16頁(裏表紙)

塚本邦雄の作品は、この中の八~九頁にあたる「詠草」欄に八首

この八首は、初心者用の「詠草」欄にとられていて主宰者・幸野羊三の次のような評が付されている。

「非常な細さを持つた作者である、此の細さが鐵線であつてはならない、金線に迄高めるやう勵む事が今後の目標であらう。勉められたい」

すなわち、塚本邦雄のたぐいまれな繊細な資質とその才能がみかきあげられて金線のごとき抒情の果実をうむことへの期待が書かれているのである。前後の作品への評が、池田義實氏の二首については「先輩の作をよく讀んで調子を覚えこんでしまふ事、多作をする事の二つを希ふ」であり、後の中森義彦氏の四首については「しっかりと來たが此のまま眞一文字に進んで欲しい。道は近い」といった一般的、初心者むけの評であるのに比してみても、又、この欄の詠草が二首から五首とまりであるのに塚本氏のみ最初にして八首

採られていることからみても、すでに出発期において塚本邦雄のたぐいまれな天稟と資質を幸野羊三は少しくみぬいていたものと思われ。

つづく六月号には塚本邦雄の作品はみられず、七月号においてさらにこの「詠草欄」に五首が採用される。そして、つづく八月号の三回目の出詠で「特別社友詠草欄」に昇格し、つづく九月号から一躍、準同人となり、以降昭和二十三年の九月号まで一回の欠詠もなく作品を発表してゆくのである。

夏すでに緋ダリアに見る炎熱の色濃く今朝の空澄みわたる

咲きにけり七月に入る真日の下花弁裂けたる大輪ダリヤ

女松原風の行方に晝顔の花より淡き月を見にけり

ひつそりと夏を実籠る草ありて夕べは水の光り流るる

潮騒は遥かなりけり人の世に生きて獨りの夜を守りつつ

(昭和一八年八月「無題」)

向日葵の傾きふかし野のはての遠夏霞うすれそめつつも

豁然と蓮ひらけばこの朝のこゝろ新たなり禊に赴かむ

聞けゆく夏はおどろの草深くげんのしようこの散る花も見つ

見えまつる日のありや無し遥かなる谷とし聞けばいよ思ほゆ

(昭和一八年九月「無題」)

こうした塚本邦雄のもっとも初期の作品について、身近でみまもっていた幸田幸太郎は後年の「木樨」誌上で塚本の歌の傾向と影響関係について、次のようにいつている。

塚本邦雄における初期の位相(一) — 「木樨」を中心として

塚本君が幸野先生の短歌理念に敬服し、主として幸野先生を通して水穂の潮音歌学をも芭蕉の俳諧理念をもおおむね理解していたことが分る。そして「万葉よりも新古今」という考えに徹して行こうとするところが他の同人より顕著である。勿論木樨の作品にも塚本君の好ましく思わぬ作品が夥しくあつたわけであるが、大体の考え方としては誰も同門的であつたのだ。すなわち、新古今から象徴技巧を学ぼうとした。しかし、あくまで直観を重要事とし乍ら多くの同人は万葉の真実も芭蕉のまことと同様に大事にした。ひとり塚本君は芸術至上主義的姿勢を強くとつた。塚本君がそういう姿勢をとつたことについては幸野先生の指導によるところが非常に大きいと思われる。むしろ味を尊重された先生の作風と理論が塚本君を決定的にしたといつてよからう。従つて塚本君は決して異端者ではなく、先生の主軸となるものだけを引き継ごうとしたのであつたみたい。

この期の塚本が「木樨」に入門し、主宰者の幸野羊三先生を通して太田水穂の「潮音」歌学——象徴技法を学び「万葉よりも新古今」的傾向をとり、そのことによつて芸術至上主義的傾向をひとりつよくとつていたこと。しかし、このことは決して「木樨」の異端者というのではなく、幸野羊三の主軸となるものを引き継ごうとしていたということなどが解説されているのである。この期、塚本邦雄は呉の本通りの古書店で「手に入れた短歌雑誌のバックナンバー、まず第一に『潮音』の昭和十二、三年から過去二年の十数冊や「心の花」の昭和四、五年頃から昭和二、三年頃のもの、「水壺」

の昭和十年代以前のもの、「潮音」の子雑誌の「青檉」の昭和十五、六年頃のものもむさぼるように読んだことが「初心忘るべし」の講演の中でも語られていた。

「木槿」は昭和十九年にはいって、戦局がいよいよ苛烈を極めてきたこともあいまって二月、三月、四月の三回の発行にとどまっている。すでに日本の短歌の結社雑誌も昭和十八年にはいってきたころから紙面の縮小や統合廃刊の実施がおこなわれはじめ、昭和十九年にはいと、出版事業の綜合統制の強化は増々きびしくなつてゆくのである。「木槿」もその波のなかで無条件で「潮音」への合併が申込みまれている。

前略戦勢愈々熾烈を極めております折柄わが木槿の発行も何時かは制限を受けるの已むを得ざるに至るも覚悟して居りました処、昨秋大田水穂先生より無条件で潮音へ合併を申込みましたが、地方誌としての使命を考慮して確答を御猶予願つてそのまゝ今日に至りました処が最近に愈々政府が歌誌統合に乗り出して本縣でも全縣下の同人誌を全部纏めて一誌にする如き機運に至りました由で、「広島縣国民詩歌協会」より統合賛成か廃刊かの当方の内意を問合せ参りました。もとより右協会なるものは広島在の歌人某々氏等の機関の如きもので、私等平素より問題にしてゐないものではありますが、現時局下用紙の配給も無くなると思へば、同協会に合流して各自作品発表の途を構するか、潮音へ統合されて勉強を続けるか、又は一時隠忍して時局の好転を待つて再刊を計るか三途あります。(中略)態度決定は目前に迫つて来たので

あります。就ては幹部同人として日頃特別の御心配を願つてゐる廿氏の御意見の多数決に因つて決定するのが一番適當と考えますので、何卒貴下の御意嚮を至急御聞かせ下されたく御願ひ申し上げます。

という昭和十九年四月二十七日付のガリ刷りの折こみが幸野羊三の名前でくばられている。「木槿」の昭和十九年の五月からの休刊にもなつてそのアンケートの次第についてはどう決論されたかは明確でないのだが、昭和二十年にはいって、ガリ版刷りの二頁く六頁位の小冊子を三月、四月(「その一」「その二」)、五月、六月の五分冊を出しているところから推察するに、結局、「広島縣国民詩歌協会」にも統合されず、又「潮音」にも統合されず、最後の「一時隠忍して時局の好転を待つ」という孤高の道がとられたようである。

この間の塚本邦雄の作品の一徴表は、戦時下のまっただ中にありながらも(戦争)に直接かわると思われる言草の歌が皆無といつてよいぐらい無いことである。ちなみに「木槿」の昭和二十年の五月号のガリ刷りの巻頭をみると幸野羊三の次のような四首が並んでいて、くしくも時代を反映している。

皇国の神のみ怒ちりぢりの光を降りて撃ちぞ嘯なげます 幸野羊三
かむ怒ひとたび降るやあな醜 敵四百艘火柱と燃ゆ
すめろぎのみ言のまにまかしこみとただ追ひ落とせつはもの神産
あはれさは神をもちらず遙々ときほひ寄せ来て鱒の餌となる

この幸野羊三の四首は当時の斎藤茂吉の戦争歌の位相にも重なる。「皇国の神」といい、「かむ怒」「すめろぎのみ言」「神をも知らず」という。この発想は、「天皇」と「神」をイクオールで結びつけ、さらには「天皇」と「われ」との関係を天皇のみたみの「われ」、天皇の「重」、天皇の「国」へと結びつけ、「個」である自己の位相を隠蔽し、「公」の位相の浸潤の中に身をまかせ、戦争歌特有の一オクターブ高い発声と怒号へとかわってゆき、おびたしい「制服歌」的瓦礫の歌を量産してゆくのである。こうした歌が「木槿」誌上にも奔騰する中で、塚本邦雄はひとり次のような歌をガリ刷りの「木槿」誌上に発表しつづけるのである。

月暈のなほ遠白き窓明り花幽かなるも再た告げざりき
やすらげく無明にかへる面ざしの現うつつに白き春の月暈
燃え盡す春の没日にかがよひて蘇枋の花のさらに色濃き

(昭和二〇年三月「無題」)

握りしめ耐へしうつつか野薊の幽けき唄り掌にのこりつつ
紅さして楓芽をふく三月の雨は命をぬらすばかりなり
爐の底に青くねれる蜥蜴と見したまゆらに炎え上りたれ
縁ありて師のみこころと溢れたる青葉の谿に今日ぞ入り来ぬ
若葉風言さやに師はわが歌を咲き撓む花になぞらへましき
木瓜の花ひそけき屋の日に散りぬ今し微に入る師が言の葉は

(昭和二〇年四月「無題」)

向日葵もめぐりつくしぬ言問はず応へなく過ぎて今日も一日や
秋立ちぬ我れが切なき常任をはつかに彩ふ犬蓼の朱

塚本邦雄における初期の位相(一)——「木槿」を中心として

蓼の花散りては淡き片明り諦めて生かば生きらるる身ぞ
霧冷えの幾夜か地に還りゆく微けきものの翳も見たりし
軋転の幾夜か凍る臉に耀ひて皓き母にゐましき

(昭和二〇年五月「無題」)
迫り来て機影玻璃戸をよぎるとき刺し違へ死なむ怒りあるなり
春ふかく咲き疲れたる花ならし霞みつつ散るや吐息の如く
いく度かつひの春と思ひてはまた散りしきる花にまみるる

(昭和二〇年六月「無題」)

敗戦を目前にひかえた昭和二十年の上半期、塚本邦雄はひとり、「蘇枋の花」「野薊」「楓」「若葉」「木瓜の花」「向日葵」「犬蓼の朱」をうたいながら、おのれの心の位相と生死の位相を、そうしたものを見、認識するおのれの美意識を通して顕現させるべく苦吟しているのである。

三

「木槿」は昭和二十年六月、通巻一二四号をガリ刷り印刷で出し、その後、敗戦をはさんで約一年間の休刊のやむなき状態において、昭和二十一年の五月から再び発行されることになるのである。

本誌の復刊については主宰病臥中の所私も多忙に極めてゐましたので吉富小川両君の盡力に頼りました。春休みを得てやうやく主宰を訪ね見舞券々種々お話し致しましたが主宰は声を出す事が

不自由な為詳しい事は語れないので私に面倒を見るやうにとのお話でした。(中略)尚復刊でありますから何かにつけ十年余発行した前誌の精神を受けついで行く筈です。急激な時代の風潮にこびた飛躍を警戒しつつ更に清新に行きたいと思ひます。

「復刊に當りて」という文章の中で大内美行は、以上のようなことを述べている。すなわち、「木槿」復刊にあたって、それまでの主宰者・幸野羊三が病臥中であるため自分がかわつて一応、面倒をみることに。このことは幸野羊三自身も同号で「今では食欲も進み、臥ながらもこんな小文が書けるやうになつた。だがどうせ永い命ではないと思つてゐる。友人達の懇志が凝つて現在有る命の私は一切をその厚志に任して、ただのびのびと命の限りを生きて行かうと思ふ。友人達よ『木槿』の世話一切をお願いします。」と「友情——附・私の近状——」で書き、主宰者の名義だけのこして世話一切を大内美行以下の諸同人にたのむことが書かれている。これより塚本邦雄も三十六名の「木槿同人」の一人に加えられ、復刊後も作品を発表してゆくのである。この復刊号を飾つた最初の作品は「濁れ菜」と題する次のような七首であつた。

おほかたは餓にかかはるものいひの寒さむと霜に咲く花ハツ手
われとわが生死のほども特めなき菜屑や花の早も凋れつつ
及びなき魚鮮しくせらるるを人かきわけて覗き視たりし
ことさらにわれのみ飢うと嘆かめやあたたかに今日をにほふもみ
ち葉

飢え死なむ日もあらばあれ土深く清けき百合の球根埋むる
夕光り生温く背にまつはれば恋唄も歌へわが濁り声
つひにしてわが亡ひし春といはじ遅しく独活の若菜匂へり
その後、塚本邦雄は意欲的に「花薊」「あぢさる」「倫理」「いのち」と月々作品を発表しはじめるのである。「いのち」五首を発表した「木槿」昭和二十一年十月号の巻末には、次のような幸野羊三の死が報じられている。

昨秋以来御病臥中の幸野羊三先生には十月十四日午後十時三十分薬石甲斐なく御逝去遊ばされました。連絡のついた在呉同人数名翌日会葬に参列し御冥福をお祈りいたしました。

幸野羊三死後、妻の塩崎光子が選にあたり「木槿」はそのまま続刊されてゆく。そうしたなかで昭和二十二年の五月号に発表した「教寄なる花」十一首の群作は、この習作期間中に到達した塚本邦雄の一つのピークを示す作品であると思われる。

ピューリタンと褒むるが如く眩されし吾やいらいらと朱き夕雲
神々に劣れる我が情なくアネモネ畑をはだして飛び出す
言葉にもならぬ思想を引ずりて石楠花ぞ白き山へ入り行く
眞黄なる花が地上に咲きめぐり我が体重を軽からしむる
ブルガリアには薔薇咲きさかる春と聞け貧乏ゆすりのやむ吾ならぬ

G Iの群華かに歩むあたり額あげて視む春はなかりき

肉体も神も知らさぬ暗がりにはほのぼのと灯る一つ菜の花

沈滞の吾にまぶしく反りかへる藪椿なれや今に視てゐよ

埃塗れに吾も花びらに重れとローマンの木の實は云はぬ

リベラリズムは水素のやうに軽ければ藏に入り古き兜をさがす

象牙の塔の裏から出でし人間の青いネクタイのあれが己ぞ

ここにおいて「ビュートリタン」をうたい「神々」「思想」「ブルガリア」「G Iの群」「ローマンの木の實」「リベラリズム」「象牙の塔」といった、従来あまり短歌の世界ではうたわれていない新素材を駆使し、意欲的に抒情の世界を切りひらこうとしている孤高の姿がみえる。以降、「綺想曲」「アラベスク」「粋な祭」そして最後の「暗緑調・密月抄・転落公子」と作品を発表してゆくものの「われ」(五)という形而下的で日常的な第一人称の〈私〉がこの期の一首一首の作品の背後にピツタリとはりつき、今一步新しい世界へ脱却しきれないでいる。

歌人・塚本邦雄がここから真に脱出するためには、もうひとりの半身像・杉原一司との出会いをまたねばならない。塚本邦雄は前にもふれたように、すでに昭和十九年には「木槿」の他に「青檜」にも所属し、戦後は「オレンヂ」(後「日本歌人」)や同人誌「くれなる」にも所属し、作品を発表していた。その「オレンヂ」には未知の杉原一司が作品を発表しており、又同人誌「くれなる」には、後「メトード」の創刊同人である生島資子や竹島慶子も所属し熱気あふれる作品をつくっていたのである。

塚本邦雄における初期の位相(一) — 「木槿」を中心として

昭和二十二年十一月号の「木槿」には、「二十代の熱」と題する「くれなる」の仲間と作品についての塚本のエッセイがあり、参考になる。

最近大阪で二十代ばかりの人々が集つてつくつた「くれなる」といふ歌誌がある。若くして才能にめぐまれ、数多の古典、先人の作品を読み、自らも歌境に幾多の変転を重ね空想に甘えたロマンティシズムにも、生活の一断片に何かあると信じてゐる薔麗アリズムにも倦きたらず、血みどろになり、裸になり、いかにして本当の短歌、純粹詩としての短歌を生まうかと研鑽してゐる人々の集団である。美しい詩が欲しい、然し知性の系譜の無い人間の探求の無いものは、西行、芭蕉の完成した道統に寝ころぶのも同様だ。きびしい現実に生き、人間の苦悩を見つめねばならぬ、然し腕章をまき赤旗をふつて闘争の歌をうたつてゐるのは之亦熱病に近く、その作品は概ね戦時中の御用短歌とえらばぬ。高く飛躍し、きらめくやうなポエジイが大切だ、然しあの新短歌、非定型短歌のシュール・レアリズムはすでに短歌の埒をこえてゐる。こう考えて来た時どんな歌がのこるかは興味ある問題である。「くれなる」は一種の天才教育の道場の観あり生温い腰の握らぬ作家は迎へない。自他共に許す人々のみが、同じ理想をもつものばかりが、えらばれて集つてゐる。が決して独善的でも、「象牙の塔」式でもない。実に凄しい勉強をし、汎い知識を吸収してゐる。次の様な「相言葉」があるが之も決してこけおどしではない「短歌を創ることは肉体の消耗である」「古典を読む」「映画から

哲学から絵画から、天文学から音楽から、我々は学ばねばならぬ」等々。僕も一員であるがこの仲間の刺激は実に強烈だ。集つても仲間褒めは絶対にしない。「ひとりよがり」にならぬため他の批判に一心に耳を傾ける。今のところ若い故に未完成であり、血気に逸つてゐるが、それだけに実に生々とし、一種ムツとする熱気に満ちてゐる。退屈な歌だけは死んでも詠まぬ心がまへである。僕の最近感心した作品をあげると、(後略)

このあと、感心した作品として埜中清一、池田道夫、生島資子、竹島慶子、津田清子、見本きよ子の作品数首があげられている。

屋根々々々々ばかり続くなり屋根にすがりつく人にくみゐる

埜中 清一

いつしかに怒り心も滅びゆき夏雲のかけ掃き清めぬつ

なまなかに身をもちくずし夏雲の低くなれよと希ふばかりぞ耐へがてぬ朝の想ひやこのわれが死にての後も鶏頭は紅き

池田 道夫

ちりちりとちぢれゆく夕日に眼とぢぬ明日は血を流す思ひもあれよ

かなしみは天の高所にひろごりて落ちなむとしてはひゞかふごとし

風立てば青葉とともに光るなり襦袢つづりゐるわれの両掌も

生島 資子

夏帯を強く締めたり砕かるれど砕かるれど朝の思ひ正しぬ

冬の陽の白く砕ける砂浜にまつしよとこのみ言ひてかへりし

竹島 慶子

落魄と思はぬ日さへ逐はれきてつひに立たされし夏野なりけり
友らみなきそひ人妻となりゆく日海ふかき藍にわれは染まらぬ

津田 清子

この熱気あふれる集団「くれなる」の仲間と「オレンヂ」の杉原一司をあわせた位相に、塚本邦雄のめざすべき短歌の未来があったのである。

昭和二十三年十二月、はじめて「杉原一司に會い意氣投合、新誌發刊を自論」み、さらに翌二十四年八月、同人誌「Méthode」を杉原一司、生島資子、岸本光治、稗田雛子らと発行するのである。

「Méthode」はタブロイド版の二頁で、昭和二十四年八月に創刊され、約半年後には廃刊となつてゐる。それは片腕ともたのむ杉原一司が、天理外語在学中に病氣にかかり急逝したからである。「水葬物語」の「敗」文には「僕たちは共同の實驗室で、この殿堂のすべての構成要素を、より精密なより健康な方程式により、創造すべく孜孜と奮みつづけた。方程式を、僕たちはかりに「方法」とよび、ラポラトリーを「メトード」と名づけた。そのむくい無の、然し光榮あるいとなみの半ば、一九五〇年五月二一日、この實驗室の創始者は、たぐい稀な才能をひめて夭折した。畏友杉原一司二十五歳。」と記されてある。